

して實にうるさく感したるは、キン蠅の一種にして、其數幾萬なるやを知らず、黒岩氏の記事に見ゆる魚釣嶋の蠅とは同種ならん。食物等に猬集するは勿論にして、予の最苦しみたるは鳥類を剝製するの際、四圍に群集し來り、直に鳥の皮上に産卵し、之を追拂ふに違あらざりしを是なり。是れ疑もなく鳥屍体の累積によりかくは驚く可き蠅の増殖を來せし者なるべし。夜間蚊は少からざるにあらざれども、之を晝間の蠅に比すれば、九牛の一毛のみ。又爲めに安眠を妨げらるゝに至らず。

蝶類は産すれども、予の目撃せしは僅かに三種(カバマダラ) (*Danis chrysipus*, L.); アカタラハ (*Pyramis indica*, Moore); 及シシミランの一種 (*Lycaena* sp.) にすぎず。中「カバマダラ」は八重山産に比して小差異あり。尙他には數種を産するなる可し。且つかゝる孤島のことにして、蝶類は飛翔力の弱きものなれば、蝶類の形態並に生態上等に關して面白き現象ありと思惟せらる。然れども、予が獲たる材料極めて尠く、考究に資するに至らず。蛾の一種白色の者あり、極めて多く、灌木等を一打すれば數百の蛾の飛立つを見たり。

次に鞘翅類(甲虫)の比較的の種類に富めるは注意す可き點なり。殊に肉食性の種類少くして、植物の莖葉等を食する天牛科 (*Cerambycidae*) 及び象鼻科 (*Curculionidae*) のものは著しとなす。予の採集品未だ調査を経ざれば、他地方、殊に沖繩島の甲虫の種類と比較研究する能はず。從て未だ確知し難きも、本島の昆虫殊に此甲虫の如きは、陸鳥渡來と關係ある者にはあらざるなき

や。暫く後の考究を待つ。

陸棲の小動物中記す可きは、蜈蚣の多きことにして、石下朽木等の裏には必ず見らる。種類も三四種は之れある可し。蚯蚓も亦少からず、未だ種名を詳にせざれども、確に二種類あり。蝸牛は種類少けれども個數に於て可なり多く、介殼の大きさ並に厚さの比較的著しきを認む。予の採集品未だ専攻家の査定を経ざれば、茲に種名を擧ぐる能はず。

脊椎動物に至りては、島上一の淡水なきが故に、魚類は勿論兩棲類を見ず。爬蟲類にありては、唯二種の蜥蜴を獲たるのみ。一は本邦到處に普通なる「トカゲ」 (*Eumeces Marginatus*, Hallow.) にして形小なり。一は大なる種にして *Lygosoma pellopaurum*, Hallow と云ふ。此種は沖繩島に産し、且つ先年飯島博士台灣探検の際獲られしものと同種なり。此種の動物の分布如斯絶海の孤島に及べるは注意するに足る。但し大島より沖繩島に普通なる *Japalura polygonata*, Hallow (沖繩方言) は一も發見せず。且つ南小島には多き蛇(何種?) も此島には棲息するを知らず。

鳥類殊に海禽類は、本島の主要なる棲息者にして、其種類は多からざれども、其個數に於ては予等が曾て目撃せしことなき。否想像だにも浮ばざる巨數にして、全島は鳥を以て充たさると稱するも虚言にあらざ。實に一大奇觀たり。海禽類の外に他島より漂翔し來たれる陸棲の鳥二三あり。

沖繩本島に普通なる「リウキウウカラスバト」 (*Carpophaga Jouyi*, Stej.) は五月十六日に初めて渡來